

松浦佐用媛石魂録

後編

五六

913.5
マ
後編5-6

曲亭主人著

溪齋英泉画

松浦佐用媛石魂錄

東京金玉出版社

大葉子者史佚姓氏調吉士伊企儺妻也欽明二十三年將紀男麻呂河邊瓊岳征新羅不利戰已敗而士卒亂走伊企儺殿之斬寇無數終勢窮就禽然不屈焉大罵寇見殺時大葉子從在陣中與所親俱亦為寇所掠端然立望東方吟詠國歌且脫領巾麾之憤然自盡矣前集既引書紀有疑似辨言重著像贊使婦幼知其義烈蓋是篇所說以伊企儺夫妻事又有之也
文政丁亥冬十一月之吉 養笠老逸又識



松浦佐用媛石魂録前後二編姓氏目次

將相 北條時頼 北條時宗 北條實政
士庶 瀬川健三道孝 長崎頼綱 博多彌四郎素延

博多倍太郎正延 鼠川加二郎武行 長城野兵太敦宗 村山俊平 関養七 荒石勘八

牛淵九郎清繩 濱添 甲 姓名 室津船長 乙 姓名 瀬川采女吉次 瀬川浦二郎選如 己上 前編

根塚語黙齋 堯口歌二郎得時 海原澳進 無名少年 并附 屋主店九郎 奴隸貫九郎 相肩棒太

三里非三 下彌豆海邊 己上後 女流 南殿 木綿妙 玉嶋 博多彌四郎妻 姓名 秋布 己上 前編

手枕 糸款 輪栗 千鳥 己上後 浮屠 大覺禪師 前編 逆臣 筑紫經高

逆徒 邊蝦ノ平二將純入道 岩幕入道 淳實伊加太 檜垣轉馬 經高己下 通計三十九名

姓氏目次 終

松浦佐用媛石魂録後編卷之五

東都 曲亭主人編次

第十九回 伊萬里の宿に親族再聚る

拈婦の城を覆す。一念の致を所。秋布微弱の女流と雖も資る。亦俊平あり。主從撃つ大刀。透間もなく。路入々々戦ふものうら。此時既に暮初く。まだ燈火を点さねば。家の内烏暗く。進退あゝ。便を得む。加る。主の翁。隻足人かまならむ。近來殊に病身あるも。原是武藝の達人なれば。二人を敵手と物ともせむ。障子の邊に倚りけり。簾刺の雙を擡取く。受流々々且く挑む。戦ふ程。背門の方より歸來ぬ。手枕。此大刀音。強偷入りぬと思ひし。承塵に掛る。薙刀を取卸し。輕を外し。出居の紙門を颯と開た。尤も俊平を薙んと。刃の光。俊平。主を接る暇あけず。主の翁を打捨。又手枕と戦ひけり。主從夫婦生死を争ふ。主客の勢ひ劣らむ。優さを。声をうけ氣を籠。撃見。を四口の刃。夜間の嵐。

虚無僧の二人まで来て梵論々々と吹まきむ尺八吹。耳ふもかけぬ主の翁の怒る声をし
 り立ち。噫訝一た婦女子の舉動。これを仇人と呼うけり。撃んとつる。所以もある時宜
 ふよつて命を資ん。其米歴のいうふぞや。と急しく問れり。秋布のいと面あげある声隠ら
 る。俺們的親良人の讐敵を寛ふ者あるが。其名を聞え索ね来つ。人面をうぬ夕間暮ふてよ
 く其人を認めざり。疎忽をいひ釋べくもあらねど。然りとくも亦所以おたし非む。縁故を
 具は告ん。其手を放べ給へう。と云よあるじの領たぐ。膝解退けり引起せば。秋布の打落
 されさる。短刀を搔とり。鞆は斂め衣領りた合して。漣流る目を拭ひ嚮ふも名告り侍り
 いうど。定うふの聞れざりけん。とらんの鎌倉なる。執権家の御内人。瀬川采女吉次が妻。名
 を秋布と呼る。者也。良人吉次の執権の舊臣。鼠川加二郎と云者お撃れ。とが父博多彌四郎
 も。亦加二郎が奸計よりく。無實の罪を命を預せり。とらんの質強の身よあらねば。其任は堪
 ぞと雖も。武士の女兒武士の妻也。いうて仇人を撃んとてこれある義僕村澤俊平。只一人相
 具し。三総以来旅宿一つ。所在を搜索れども。未だ便りを得ざりし。前月浪速ふく。とが親

は電光の軒端を走るは異あらむ。其中は主の翁の頻りも早は秋布を挂る。懸ぐ氣色もよく思ひの随は疲る。咄と噓く秋布が刃を蹴と打落し。怯むを得たりと突倒し。膝は楚と組布く。やよ糸教の何處にをる。狼藉者を組留たり。とく燈燭をもく来む。と呼る声も俊平の吐嗟と懸ぐ心の轉倒。撃大刀取次は腕を透間。早くはけ入は手枕。振閃めうら音む。兼刀は俊平を左の膝刀尖深くかけられ。一声苦と叫びもあへむ。脣唇は挫と俯してん。げり活處は糸教の箱埋火を掻起し。焔兒索も移りたる。手燭をとりてぞ走り来る。灯光は初めく面をあひまをる。主客の仰天大うとあらむ。さしも秋布主従が仇人。瀬川加二郎ど。と思ひの其人からで。齡五十五は餘りたる。半白の翁あり似たる所は是も亦。右の眼の昔とるの。其面影と年歳に似るべうも非ざりけり。又このあるじが組布とる。齡廿は足らむと覺し。た。いと唯妍ある女子よく。又手枕は研什されし。も素より認めぬ男子あるが。素は荒袴の。四天とう云我衣を被く。かおじ白袴の顛纏をまさり。女子も亦白無垢の夾衣。白練の襟を被る。其打扮の尋常からぬも。送ふ心得ざりけり。かゝる折うら外面。夜修行をふる旅

虚無僧の二人まで来て梵論々々と吹まさむ尺八。耳もかけぬ主の翁の怒まる声をぬり立。噫訝し夫婦女子の舉動。それを仇人と呼うけ。撃んとしつる。所以もやある時互ふよつと命を資ん。其来歴のいうふぞ。と急しく問れ。秋布のいと面あげある声。隠らる。俺們的親良人の讐敵を冤ふ者あるが。其名を聞え索ね来つ。人面どうぬ夕間暮ふて。よく其人を認めざし。疎忽をいひ釋べくもあらねど。然りとくも亦所以たは非む。縁故を具は吾ん。其手を放べ給へう。と云あるじの領た。膝解退けり引起せば。秋布の打落され。短刀を掻とり。鞋は斂め衣領うた合して。漣流する目を拭ひ。嚮ふも名告り侍りし。うど。定りぬ聞れざりけん。とらぬを鎌倉なる。執權家の御内人。瀬川采女吉次が妻。名を秋布と呼る。者也。良人吉次の執權の舊臣。鼠川加二郎と云者も撃れ。且が父博多彌四郎も。亦加二郎が奸計より。無實の罪を預せり。とらぬ質強の身はあらねば。其任は堪む。と雖も。武士の女兒武士の妻也。いりて仇人を撃んとてこれある義僕村澤俊平。只一人相具し。三稔以来旅宿し。所在を捜索れども。未だ便りを得ざりし。前月浪速も。且が親

の舊僕ある。関養七と云者。圖らむ環會ひより。仇人の所在を定う。知りぬ。その肥前國
 彼杵郡伊万里の莊は郷士あり。其姓名は鼠川加二郎。一眼普く隻足薄より。原の鎌倉武士お
 りた。人傳は聞つといへり。仇人の素より一眼普く。隻足も亦少許薄より。況て其姓名の疑
 ふべくも非ざれば。此地を投ぐ赴く折。箇様々々の故をもて。彼養七の浪速に留る。主従二人
 舟行より。けふも旗津の港は著ぬ。雲時も猶豫をべた。あらねば。索ねく米ぬる王莽時。其
 名を知るの。其人を認めて早に疎忽の閑戦。人違せの。みからで。しが身の竟は組布れ。
 三稔の艱苦は扈從せ。俊平の深夷を負ぬ。斯ふを毎は飛鳥の。鶺鴒の歡歎。微運を猜し
 給ひ給。といひつ。鼻をうちかみとる。思ひがけおた物語。再び驚く手枕糸菰。をを理りと
 も今更は慰う給。堪捨の。月ふらなく。望の夜の。影は愛くや吹く尺八の。門の音律も止ま
 けり。あるにほら。うち聞。感嘆一つ。貌を改め。遅らう。烈女の魂。成と敗。時運
 は依れども。志は多く得が。末世の美談と。おさんの。むう。唐山もか。る例あり。魯
 の曾參の賢人ある。宋も亦曾參。と呼きたる。惡棍あり。宋の曾參人を殺し。曾子の母を

驚し。孔子の面影陽虎は似されば。遂は陳蔡の厄難あり。しが姓名と肢體の不具と。烈女の響
 は似たる事。亦怪しむ。足らむと雖も。しが氏の根塚より。鼠川と同じうらむ。且俗稱も若
 二郎也。隱居し。雅號を。語黙齋と唱るの。か。まは鼠川加二郎と。又根塚若二郎と。其訓
 讀の相似たるも。各是を真名は寫せば。聊も同じうらむ。傳聞の錯誤の所謂耳食の迷ひ。な
 れ。亦一奇談と云べたの。要おた言ふ似されども。お疑ひを釋せん爲ふ。しが素生を具
 は告ん。心を鎮め。聞給へ。數おらねども。某も。北條譜第の家臣ふ。先君最明寺殿の御時
 某をもて守の長男。時輔朝臣は隸られ。然る。しが君時輔ぬ。守の長男ありけれ
 ども。妾腹とるより。家督ふ。立られ。御舍弟時宗朝臣をもて。箕裘を嗣給ひ。らば。
 時輔ぬ。是を怨む。遂は逆謀の萌あり。三綱將は亂きんとせ。時の不祥の悲。さ。某
 折々面を犯し。諫言三。及び。らども。一毫も聽きねば。已事を得。身退れ。且く京
 師は月日を送れ。有然程は時輔ぬ。六波羅の廳は居られ。帝關の守護より。時。筑紫
 の探題經高ぬ。と。潜志を合せ。最明寺殿卒去の後。謀反の氣色顯。を。時宗朝臣



早く猜して。敗れ京師ふく。忽地誅戮せられけり。あの故は經高も。免れ難しと思ひけん。
 遂に反逆の旗を揚しより。西の波風打懸さし。時宗朝臣の武徳よりて。えや治り三稔
 ありぬ。但經高の往方忘れぬ。存亡定らざるの。時輔ぬの自滅の一條不幸より
 らるが先見の達さし。亦更ふ。心は快うらね。誓く又他姓に仕へむ。又故ありく。え
 ぐと。此地に移り住しより。文學武藝の師とあり。弟子夥附し。比。風眼よりて。隻眼を失
 ひ。亦風濕より。隻足痺り。この故は隱居し。語黙齋と自稱せり。又是ある。日が妻ふ
 く。名を手枕と呼びたり。そが親の豊後ある。玖珠の豆町の莊屋あり。折竹二三六が女兒あ
 り。さゆを繼母の惡心ふく。十五の時花街に賣らま。京師六條ある妓院あり。比。いと
 ひがた故あり。其是を携り。此地に移り住し。後。女の子孫を産たり。糸萩。今母の。
 傍に侍侍即渠也。四稔むり前。比。同國末の龍華ある。瀬川浦二郎と縁を結び。納采
 をとり替せし。其比。某病著起。婚姻遲滞。及ぶ程。其次の年の春。浦二郎。其家兄。
 瀬川吉次を送らん。爲。鎌倉へ赴く。其老母玉島。物故のよ。を告。一宿も留ら

で辭し去りしが。今に至る。音耗なれば。女兒を更。其方の天を旦暮。眺めく
 らし。俟不樂。奪せぬ日も。あうりし。豈思。んや人違。て。慢。し。れ。を。撃。んと。ま。つ。る。烈
 女秋布主従。比。が。婿がねの家兄あり。瀬川采女吉次の後家と。若黨からんと。迷。傷
 害のあうりし。尚幸。ひ。似。されども。恨。らく。忠義の。壮。俊。平。と。や。らん。の。救。ふ。よ。
 か。た。灸。所。の。深。痕。も。命。運。と。い。云。が。ら。痛。ま。さ。よ。と。い。ひ。つ。も。見。う。へ。る。眼。色。を。ま。ば。さ
 け。バ。秋。布。の。面。あ。さ。と。又。衰。も。一。入。ふ。く。流。る。涙。を。押。拭。ひ。いと。巨。細。ある。御。物。語。を。聞。く
 惑。ひ。の。覺。し。より。此。身。一。つ。を。今。更。し。置。ど。ころ。あ。く。侍。る。か。被。鼠。川。加。二。郎。と。又。根。塚。若。二。郎
 と。同。じ。唱。を。片。聞。し。文字。の。大。く。異。ある。を。得。聞。ざ。り。ける。疎。齒。さ。よ。如。以。亡。夫。の。家。弟。の
 舅。姑。と。鑢。を。削。し。疎。忽。し。より。命。差。か。俊。平。が。斯。かり。ける。も。主。従。の。皆。愆。より。起。る。ぬ
 と。思。へ。バ。此。身。を。恨。る。の。と。取。し。さ。よ。と。む。り。し。包。ま。ら。ね。さ。る。袖。の。雨。果。し。お。げ。た。を。想。像。る。
 手。枕。いと。慰。う。ね。く。縁。は。係。る。親。に。た。違。と。あ。ら。ぬ。事。と。い。ひ。あ。が。ら。習。ひ。で。馴。れ。し。舞。刀
 の。ま。ら。ぬ。が。拙。た。手。の。ま。り。し。も。か。の。折。主。の。後。室。を。組。布。れ。し。駭。た。の。透。間。し。う。け。し。も。愆

の功名こうめいならぬ今更いまさら後悔こうわい。要えらち所行わぎで侍はべりた。と勸解わひつ、額ひたいを押拊おしかてて。歎息たんそくをれば。糸菰いとむぎも共ともふ朕まがたを潤うるほし。生別いせわかきせ。郎なごこの往方ゆくへを。想像おぼひやるご。悲かなし。死別しにわかれ給たまひぬる。夫をとこの爲ため。爲ならば。御前ごぜの。相應あはひ。うらぬ仇撃あたらうちの。人違ひとたがへ。只ただ一人ひとりある。忠義ちゆうぎめて。ちた從者ともびとを。撃うた。給たまへ。便著たつちた。心細こころこさい。い。う。ならん。痛いたまし。さ。よ。と。い。ひ。う。け。く。背向そむかひ。ま。り。く。目めを。拭ぬぐへ。ば。若わか。二。郎。辭じらうご。を。勵はげし。く。無益むやくの。諄言しゆんげん。千。萬。句。も。傷人たぢの。爲ため。ま。る。よ。し。あ。ら。ん。や。さ。し。も。深。痕かかて。と。見。ゆ。れ。ど。も。絆。斷こたせ。さ。る。や。否いなを。ま。ら。む。届とどう。ぬ。ま。で。も。分。抱かいはか。せ。ま。や。と。く。呼。活よひい。よ。と。く。く。と。良人よつと。よ。心こころ。つ。け。ら。れ。く。手。枕たまくら。や。を。ら。俊。平とんべい。が。ほ。と。り。よ。寄。つ。手。を。う。け。て。扶。起たすけおこ。せ。ば。漬。る。鮮。血あまは。よ。聲こゑ。を。隠かく。ら。し。く。や。よ。喃。俊。平とんべい。殿。と。や。ら。ん。思。ひ。し。よ。似。を。痕あざ。に。淺。う。り。心こころ。を。た。し。う。よ。ま。給。へ。う。し。や。よ。喃。々なう。と。糸。菰いとむぎ。も。俱とも。よ。右みぎ。よ。り。左ひだり。よ。り。聲こゑ。を。合あ。ひ。て。呼。活よひい。き。ば。俊。平。眼とんべい。を。見。ひ。ら。た。く。左。見。右。見。は。息いき。を。吻くち。た。灸せう。所よの。深。痕かかて。よ。あ。れ。ど。も。そ。が。儘。死まじ。も。果。ざ。し。し。を。面。目めんめく。あ。さ。よ。俯。く。を。り。圖。ら。む。も。聞。く。若。二。郎。殿。御。夫。婦。の。物。語。り。よ。く。因。果。の。道。理。を。悟。り。よ。た。喃。婦。御。前。二。三。郎。で。候。ぞ。幼。推。た。時。よ。別。れ。し。う。ば。送。よ。認。忘。れ。た。り。け。ゆ。を。思。ひ。が。け。ち。た。對。面。よ。こ。と。と。云。よ。手。枕。驚。た。く。ま。ら。い。を。婦

と。呼。う。け。く。云。々。と。名。告。ま。る。い。原。米。御。身。の。ま。ら。い。が。爲。よ。異。母。の。弟。あ。る。二。三。郎。よ。く。あ。り。ける。歎。あ。を。淺。ま。し。や。何。と。せん。二。十。餘。あ。ま。り。信。ち。た。弟。よ。環。會。ひ。な。が。ら。送。よ。劍。を。削。る。ま。で。挑。戰。ひ。朕。疾。を。負。せ。し。こ。を。悲。し。け。れ。と。歎。け。ば。俱。よ。糸。菰。も。あ。よ。再。び。胸。潰。れ。く。末。期。あ。が。ら。よ。叔。父。煙。の。涙。と。せ。も。よ。名。對。面。あ。は。さ。は。く。く。よ。勸。ま。ば。秋。布。も。亦。驚。た。嘆。い。く。い。と。衰。し。く。痛。し。く。思。ふ。も。の。う。ら。有。難。よ。差。く。う。ち。目。成。る。の。よ。分。抱。を。手。枕。親。子。よ。打。任。し。く。間。近。く。い。未。だ。得。よ。ら。む。又。若。二。郎。を。手。を。又。た。眼。を。閉。く。觀。念。の。外。よ。い。他。支。も。あ。り。け。り。登。時。俊。平。の。突。立。さ。る。手。を。置。う。え。く。又。數。回。息。を。吻。た。喃。婦。御。前。さ。の。ま。い。悔。ま。を。顯。ま。よ。似。さ。れ。ど。も。む。う。し。ま。が。母。の。惡。心。よ。く。父。よ。勸。め。く。河。竹。の。流。れ。の。淵。よ。御。身。を。沈。め。其。身。價。を。私。し。く。よ。う。ら。ぬ。人。と。走。り。給。ひ。し。家。の。亂。ま。よ。家。尊。の。大。人。の。氣。病。よ。患。く。世。を。逝。り。給。ひ。家。産。斷。絶。ま。く。け。れ。ば。某。を。里。人。の。好。意。よ。よ。り。く。肥。前。國。御。厨。の。辨。よ。赴。た。て。瀬。川。健。三。道。孝。ぬ。し。よ。童。奉。公。せ。し。時。よ。り。母。が。さ。の。氏。を。冒。し。て。村。澤。俊。平。と。名。告。さ。り。然。り。け。れ

ども心は差く。母の上の更之。故郷の事も人語らむ。素より不才あるをもく。道孝吉
 次二代の主は。世稔あまり仕まじも。果敢々々た。功もあし。切く主恩を報ぜん爲。後室
 の御供して。三稔以来艱苦を辭せむ。仇人を索廻れども。未だ仇人あふよしもあく。非命
 は此身を果す事。親の因果の子は報いむ。天道忠義を憎むといはん歎。まうにあれども某
 が心は亦復取るとあり。仇人を討しまゐらせむ。懺悔しく法師はあふんと。思ひし事も空
 望をた。いにて死ん罪深うり。後室さほも聞し召れよ。兼ふに長た御病著。某日夜看
 とりまゐらせ。起臥し給ふ度毎。親しく介抱し奉りし。其折聊心動た。深く憐み奉
 りしを。思ひうへしく自ら誠め。さまで迷へる事いふたを。此比夢衣縫ふ。捨磨備前の環
 おほ。大山峠の麓ふく。慢は御身は迫りつ。挑まき。送は争ふ程。御身の命を預し給ひ。
 某も亦後悔しく。吐うた切ると思ひつ。忽然として覺ふけり。夢に五臓の勞れみ成ゆ。戯
 譎ありとも思ひより出むと云事あしといへ。此事人のあらむと云とも。我が心に差ざら
 んや。大約邪淫の人を傷。自ら害ふ誠の。よく守り難た。夢ふども斯の如し。嚮は恩人

無名氏の。某を熱相しく。色慾の迷ひより。此身を愆つともしあらん。と誠らま
 る其言の。違へるふ似されども。母の邪淫の惡業。竟は此身は報へるあらば。是も亦色慾
 の。迷ひといひまし識の違ひを。今の千萬悔むも甲斐あし。唯願くは姉御前御夫婦。便りま
 くおた後室さほの。助大刀して仇人加二郎を。討捕らし給はらば。よしや千僧萬卷の讀經ふ
 もまして成佛せん。頼まうを。此事の。承引給へとうた口説く。聲も弱りて血は塗ま
 る。手を戦へ伏拜む。忠信義僕。今般の懺悔の。理を逼て哀れあり。手枕聞くは堪らね。と
 よいとむうり。泣沈まらる。涙の間は頭を擡。喃二三郎否。俊平殿。御身の母御の心操
 の。好もあま。夢もあま。まらうが爲ふも親と云。名に削られぬ養育の。恩を思へば河竹の淵
 瀬は沈められらる。時の災難。此身の薄命。况御身も棄られ。艱苦を歷つ。良主は任へ
 る。忠義を盡せる。どのあらむ。手よりけり。姉をうらまで身の宿業と。思ひ諦め給ひ
 ぬ。さし心。の。怜利を。汲見て。いふは最惜。多くもあらぬ姉弟。いつくまでも。睦
 く。世ふ。在り。あ。ば。憂。は。就。樂。た。は。就。く。憑。一。た。相。譚。敵。と。あ。る。べ。た。は。會。ふ。を。列。ま。の。惡。因

縁御身が母御の業報ふく。姉は撃る、者おらば。まらにも花街ありし時。客を誑謀し身を脱れたる。報ひより只一箇なる。弟を殺まといわれやせん。哀しうなと。群立ち泣つ。唧つ縁返を。学環なして糸裁も。涙の雨は頭垂れく。瘡押手も挽げなる。三人の間へ秋布も。膝を進めて。やよ俊平。疾も、の、いひさうしを。親族達の愁嘆と。吾儕の疎忽も恥らひく。先より泣くおとるぞや。此年来の忠信義騰。心ともな死夢寐ども。心は留めし潔白の。心も其處は顯きく。痛ましともいと惜しとも。いひ盡されぬ哀傷悲愁の。やるせに絶くあらむ。如之に神も佛も。捐られさりけん。これながら。宿世の業の竭むして。世は存命くあらん限り。朝な夕なの唱名讀經は。和殿の菩提は。吊ん願ふに一念正覺の。往生せよ。と薦めたる。群聞えくや。俊平は。然も。歡一げは點頭の。登時ある。若二郎は。又たとる手を釋く。空うち仰ぎて。嗟嘆は勝む。嗚呼天なる哉。命なる哉。思ふまじく。村澤氏果敢おた夢をも深く羞く。老實の心。潔し。且其死は臨で一言も。私に及ぶ事なく。只宿業は感むるの。ま。まが身の爲に。妻の弟。是假初の義はあらむ。まが身の隻足不自由は

く。旅行は便りを得むと云とも。杖は携し車は坐しても。後室の助太刀ま。仇人を撃さてやい己ん。此義は心安うかべ。願ふは一宵の悪夢ども。恥ぢる人の誠を。まが罪障も亦重なり。問を語りは似れども。まが妻妓院はありし時。某も洵浪く。花を素を蛭蝶の。香をなつりし通ひ初く。よは洵浪りしを契かもの。財盡ていつとなく。あふ夜も稀まなりし。比。手枕の上毛な。木瀬屋鑿吉と云商旅は。償身され上毛へ。伴はゆく道中ま。身を脱き影を隠して。まが浪宅は。索格来つ。箇様々々と由を報く。願ふは夫婦まならんといへり。斯いへば今更ま。まが非を償ふに似れども。某は性とし。道は違へ。傍事を好まむ。夥の財帛を費せし。人の伴ふ遊女の。遣れ来つを幸ひし。相伴は。賊をみ。あらむもがなと思ひし。ども。否。生るうへらと。思ひ詰る。女子の一念。うねて誓ひし。よしさへあを。懐し入る。窮鳥を。獵夫の手は渡さんや。と思ふ身勝手。筋氣の過失。遂は手枕を携く。此地は。道れく人の師となりつ。洵世を渡り程は。病疴は。より。羸弱不具の。行歩も人並ならざる。人を掠めし。天の冥罰。刺女兒を婿がねの。浦二郎は。添ふ事

浦二郎殿。見は目い誰も違ひぬを。此秋布の刀自も亦和殿をもつて良人とほ。今更輝の心を
 得がと。おる邪猜ふやあらねども。三稔の程は秋布どのと。夫婦の約束せられ一欺辱は色
 迷ふとも。嫂と不義をべた。白さる和殿あらんとい。つやく思ひうけざりた。事の情を
 詳し。説示く吾曹の迷ひを解し給ひね。と詰まば吉次勝を進め。初て候根塚氏兼
 小某等圖らむも。外面も立在て。仇討の更の錯悞。後平が不慮の剣難。且人々の問答と。讎
 悔の由を洩聞く。尤やく圓居み入らむやと。思ひざり一ふあらねども。悲歎は霎時胸も塞
 將辨の腰を折らゆと。稍只今も及べる。某と浦二郎とい。雙生ふてありければ。その
 面影の似るいささ。語音應對進止。咳くまでも違ふとあり。お、をもて動もまれば。
 兄を弟と思ひ謬ち。弟を兄と認違らる。日比親一死達ごふも。然る錯悞の間々あり。況
 對面一兩度。その後列まき年を歴たり。浦二郎あらぬ某を。浦二郎ぞと思ひれ。疎忽
 似く疎忽あらむ。豫くも悪名の聞れ々ん。某は浦二郎が兄瀬川采女吉次。又某は
 立代にて。相摸ある動の濱ふて。鼠川加二郎等と血戦。大洋は漂没せ。則第浦二

郎。とむりりふていあ、る得がとく。いよく益疑まん敷。縁由を詳し告ん。人々静
 聞給へ秋布もよく聞ねり。抑去々歳の春の比。某矢田の陳中より。牛淵九郎清繩を
 追蒐て。末の龍華に到る。時圖らむも賣母玉嶋。弟浦二郎は環會。母玉嶋の義はよつと怒
 地ふ自殺。一叔父清繩も先非を悔て。俱に刃に伏せし折。某を熱相して。必死の厄難
 近死あらん。弟浦二郎をもく代よといへり。既ふして鎌倉より。この日到著のおん使傳
 多倍太郎索来。某を召へさる。君命を傳へたり。さばれ賣母の喪はあれむ。柩送りの
 免許を願ふ。弟の家は七日むり。逗留してあり程。浦二郎は叔父清繩の遺言を固
 く守る。鎌倉へ趣た。某は厄難。代らんといひうど。然ては身身を脱る。とも
 弟を殺すの憂ひあらん。加以吾君を。欺た奉るの怕れなれ。あらむ。その義は一切
 従ひがと。と推辭つ緯の果されぬ。所詮同胞共侶。鎌倉へ行んといひ。浦二郎は伊
 萬里な侍。根塚氏の獨女兒。系族どのと婚姻の約束。とるよを告。東行は尚餘日あらば。
 辭別はゆらばと。商量定りぬらざり。その賣浦二郎が又いふやう。同胞俱は鎌倉へ。



同船しそゆうんとかもへば。速謀なれし似たり。願ふに霎時某は。姓名を借し給へ。出帆の日よりして。某は。瀬川采女吉次と假稱し。官船に乗て東に至らん。おん身の又瀬川浦二郎と假稱して。陸地を鎌倉へ趣給へ。幸ひよ。水陸とも。同胞無異。東著せば各名字を舊よりへ。各衣裳を脱改め。叔鎌倉に到ると知り。君を欺く傍難なく。迭に運を試ま。方あり。某の船中より。災害はあひぬるとも。嫡家繁昌まると知り。聊も憾なく。此議を承引給ひぬ。今面より腹を切切。未だの厄は代らんとて。思ひ訣する面魂。某竟に争ひうねく。僅にその意に任せし。浦二郎歡びて。然らばおん身の朝の暁。某が衣裳を被て。伊萬里へ行て。根塚氏親子の人々云々と。告て辭別を去給へ。豫て相識る彼人々の。聊も疑ふことなく。浦二郎ぞと思ひまなば。鎌倉まで同胞が。名をとり替て趣くとも。影護た事なし。この義に従ひ給ひぬと。眞實立て弄くを。否といひん。いさばがふて。これをその意に任せし。かの折あへ。来ぬるもの。浦二郎あつて。某かくて末の龍華なる。宿所へ還れば。弟のをらむ。出居の柱に遣はる。消息あるを立より

見る。某が伊萬里へとて。出てゆたぬるそ。日よなん。博多倍太郎より書翰到来して。東行を催促せられ。且倍太郎のこの曉。陸地より歸府をといへり。是より浦二郎の。某が甲冑を被て。某が従者を具し。先矢田の陣中に到て。實政ぬに見参し。舟行を鎌倉へ趣くべし。亦某の。浦二郎が衣裳をもて。行装を整へ。家をば鄰に莊客們に委ね措て。尤やく鎌倉へ還り給へ。孰も遅速ありといふとも。藤澤にて俟合せん。この意を得させ給へ。とあり。某これ心忙て。形の如く準備し。潜びて獨陸地より。鎌倉へ還る程。起行の日も後れし。浦二郎が乗る船。日毎に順風ありけるふや。某は先づつと。大船約十日むりあるべし。叔某の花月の比。箱藤澤までかへり来つる。鎌倉の風聲聞え。浦二郎の動の濱ふ。鼠川加二郎等。撃れらる。亡骸の波に引きて。忽ち地往方も知らむ。又某が舅博多彌四郎の。箇様々々の支ふより。既誅戮せられたりといふ。巷談街説定られば。某驚た且うち歎た。進退あ。谷り。此の比。經高が所在を索て。よく討捕るものあらば。如此々々の恩賞あらん。罪あるものといふとも。その罪を免されん。と

御させ給ひおん下知の市中へも聞えしう。其熱思ふやう。叔父清繩の説相違いも
其が名を冒しとる。第に果し災害し。命を喪ひぬるを悲しけれ。然るを又今さらし
其 鎌倉へかへり参り。輝云々と聞えあげあむ。私の相謀もて。第に姓名を貸し。守
を欺た奉る。怠慢の罪ありとせられん。おん咎めも測りがなく。且吉次の道中ふ。厄難
あらんよしを知りて。その面影の相背する。第に己が打扮さし。加二郎等撃せし
全く命を惜める。と人はいれんも朽をいかるべし。所詮且く世を潜び。第と舅の
仇人ある。加二郎を撃捕るべく。并に賊首經高が所在を索ね搦捕。鎌倉へ率もて参らむ。
恥を雪め面を發是。優する大功あら。と肚裏ふて尋思を一つ。旅虚無僧は打扮
安房上総へうち渡り。下総常陸いへむさる。越路陸奥の盡處までも。徧歴せざる所なく。公
私の讐を索ねつ。旅宿は年を累るものうら。いまだ便りを得ざりしうむ。この春に京師よ
り。浪速津を経歴せし。いぬる夜関養七が宮嶋吟の邊ふ。莊客們は撃ちし。逃れ来
つるは圖らむ遭ひぬ。是より秋布が。俊平を相具し。三総仇人を索る事も。及この里

加二郎が。隠れをまりと傳聞て。西國船は便りを求め。えやうち立ぬ。と養七が。報るは哀歎
みづうら禁ぜむ。絆の虚實も。勝負の程も。おろもとなき思ふよ。養七を伴ふ。けふ
しもこの地は到著せり。其が寶母玉嶋。三浦泰村の忠臣あり。岬平馬が女兒。岬氏
をその先祖。龍神の子といへり。こゝをも子孫するもの。腋の下は黒子あり。その形
似たり。其等同胞も。外戚の血路を引て。又腋の下は黒子あり。只其と浦二郎と。聊
異なる處ある。其は総角の比。武藝の試合をせし折。木刀は臂を破られ。その痕
の迹右のうらあり。浦二郎ふ。この痕の迹あり。これをも證とまべし。是見給へと袖を
褰げて。糸紋等し示せしうむ。手枕は只鷲呆ま。若二郎は目を注るの。忽地望を失
ふ。果敢々々ま。くい應も得せむ。そが中に糸紋。思ひ難つ。声立ち。よ。とむりし泣
沈む。涙は胸の曇りて。疑ひさへ不齊ざりけり。

松浦佐用媛石魂録後編卷之五終

高き馬に國の邊もよも... 舊怨を釋く善新怨を購ふ

松浦佐用媛石魂録後編卷之六

東都 曲亭主人編次

第二十回

舊怨を釋く善新怨を購ふ

登時根塚若二郎の瀬川吉次が物語は感嘆一つ、髀を拍く奇あるを其相肖する事相親身長語音まで兄弟一毫も違ぬ者の雙兒と云ともいと稀ありむう一唐山は張伯階と云者あり。そが弟を張仲階といひました。兄弟よく相肖する事譬は影と貌の如く有此而あるとた。仲階が妻某氏いと唯妍ふ化粧一つ。兄伯階がほとりふゆた。けふのまらわが結髪化粧を。未だよくも見給いむや。美うこそ侍らめ。と打戯ま。伯階が手をどろんとしてけまば。伯階驚た訝ま。あるまが弟の仲階ぞと。思ひたがへーものおらん。と早くも悟りて打微笑。まれも是伯階あり。仲階ふの非むうと。云は其妻駭羞。忽地走り退たつ。姑くく又伯階が。端近く出くををり。被妻亦遙ふ見く。あまの真のまが夫と。思ひつ、身

邊りに至りて。襄さふを妻わらわ。怨うらみ。舎い兄ろねを御身おんみと認み違ちがへ。無あ禮れいある事ことをいひ侍はり。いと取とり
 く侍はり。と告つる。伯はく階かいいよく。采あき。これこは伯はく階かいあり。乍そ麼ま何事なにをいひ侍はり。やらん。い
 と漫ま。と。寤さき。彼かの妻つま吐あ。と驚おど。差さ。再また。走はり。隠かくれ。が。そ。が。儘ま。便べん室むの。を。り。く。稍し。久く
 一いく。得え。出で。ざり。又また。白はく。波は。兄あに。弟あに。の。事こと。これ。似に。ざり。鬮さ。ふ。秋あき。布ふ。の。刀やいば。自よ。と。糸いと。菟う。と。送か。郎ら。を。争あ。ひ。一
 も。日ひ。を。同お。う。ま。語かた。る。べ。無む。益やく。の。辨べん。似に。さ。ま。じ。も。二ふた。が。女むすめ。兒こ。糸いと。菟う。の。戊つちのえ。の。未ひつじ。の。年とし。己つちのえ。の。午うま
 の。月つき。戊つちのえ。の。未ひつじ。の。日ひ。己つちのえ。の。午うま。の。時とき。未うま。の。生うま。れ。り。か。ま。き。自お。然ぜん。と。其その。八はち。字じ。の。八はち。字じ。の。生うま。れ。年とし。生うま。れ。
 月つき。生うま。れ。一いち。日にち。生うま。れ。一いち。時とき。未うま。の。土つち。未うま。の。属ぞく。を。る。の。ま。ふ。ら。む。此この。日ひ。門もん。人にん。某か。甲が。菟う。の。早はや。咲さ。を。贈お。り。来こ。
 され。糸いと。菟う。と。名な。づ。け。ふ。た。有あ。此この。而して。後のち。よく。思おも。へ。菟う。の。芭か。は。依よ。ら。ざ。ま。き。伏ふ。倒た。れ。て。立た。事こと。難がた。う。
 り。譬たと。へ。婦をんな。の。夫をとこ。依よ。り。て。生う。涯がい。を。送おく。る。似に。ざり。然しか。る。ふ。糸いと。菟う。の。瀬せ。川がわ。浦うら。二に。郎ら。と。縁え。一いつ。を。結むす。び。く。
 未いま。ど。婚こん。姻いん。を。整ととの。む。生い。列い。れ。一いち。て。三さん。稔しん。の。間あひま。俟まち。不ふ。樂らく。ざり。一いち。甲か。斐ひ。も。あ。く。凶あし。計をた。を。聞き。う。ら。ふ。思おも。ひ
 細こ。り。て。病やま。も。や。せん。と。思おも。ふ。親おや。の。愚おろ。痴ち。を。ら。め。面めん。目め。を。や。と。い。ひ。か。け。て。頻しばしば。り。嘆たん。息そく。を。さ。り。一
 う。む。手た。枕まくら。が。憾うらみ。の。更さら。へ。吉よ。次しつ。も。秋あき。布ふ。も。慰あな。め。う。ね。て。共とも。侶り。一いち。頭かぶ。を。垂た。下た。り。若わか。二に。郎ら。貌かたち

を改あらた。め。て。嗜あ。ま。れ。お。が。ら。烏くわ。許こ。あり。た。瀬せ。川がわ。氏し。の。俱ぐ。せ。ら。れ。一いち。閑い。養やう。七しち。殿でん。と。や。らん。小こ。や。ら。た。處ところ。一
 居ゐ。給たま。い。む。と。も。誘いざ。り。て。あ。と。へ。進ま。み。給たま。へ。と。客きやく。を。漏し。さ。ぬ。あ。る。一いち。態たい。ふ。も。養やう。七しち。の。ま。ど。應お。を。せ。む。先まづ
 秋あき。布ふ。に。打うち。對むか。ひ。興お。ぎ。は。最い。も。面おも。を。く。候まを。け。ふ。仇あだ。撃うち。の。錯まち。誤がひ。一いち。某か。が。只ただ。俗ぞく。語ご。を。信ま。ん。で。深ふか。く。も。思おも。ひ
 ざ。り。一いち。より。俊と。平へい。を。さ。へ。喪う。ひ。ぬ。所い。の。云い。一いち。盲もう。衆しゆ。盲もう。を。引ひ。た。一いち。犬けん。形かたち。を。認あ。り。て。羣ぐん。犬けん。無む。形かたち。を。吹ふ。く
 一いち。似に。たり。然しか。に。あ。れ。ど。も。御おん。教きやく。書しょ。の。取とり。復かへ。一いち。も。て。參ま。り。ぬ。襄さ。ふ。酒さか。樓しよ。の。邊へ。に。列た。り。本ほん。り。一
 一いち。より。送い。歩あ。し。出い。て。宮みや。嶋じま。吟ぎん。へ。走は。り。か。へ。る。一いち。も。や。莊しやう。客かく。們ら。打うち。聚あ。ひ。く。死し。散さん。を。檢み。つ。一いち。罵のの。り。と。衆しゆ。皆みな
 評ひやう。議ぎ。區く。々々。當その。下した。某か。思おも。ふ。や。う。莊しやう。客かく。們ら。の。三さん。人にん。の。死し。散さん。一いち。心こころ。を。奪う。れ。く。未いま。ど。彼かの。御おん。教きやく。書しょ。の。取とり。揚あ。げ
 一いち。は。一いち。暇い。ま。あ。ら。う。ら。ん。不ふ。意い。一いち。發お。て。搔か。搔か。ら。ぬ。御おん。教きやく。書しょ。の。裡うち。面めん。敷し。然しか。ら。む。を。駕か。籠かご。の。邊へ。に。あ。ら。ん。
 一いち。よく。見み。定さ。め。て。取と。ら。ん。む。と。尋し。思おも。を。一いち。つ。近ちか。づ。く。程ほど。一いち。月つき。の。い。よ。く。限い。ま。あ。く。て。塵ちり。芥かい。を。ら。分わ。つ
 一いち。足た。れ。り。か。く。て。件けん。の。吟ぎん。路ろ。へ。行ゆ。か。り。と。る。や。う。一いち。も。と。見み。れ。ば。果は。た。一いち。て。御おん。教きやく。書しょ。の。油あぶら。紙し。一いち。包か。つ
 一いち。める。儘ま。で。駕か。籠かご。の。邊へ。に。遣あ。り。て。有あ。り。一いち。が。物もの。得え。つ。と。走は。り。進ま。り。て。もの。を。も。い。ひ。を。御おん。教きやく。書しょ。の。搔か。取と。り
 一いち。早はや。く。逃に。げ。と。ま。き。ば。莊しやう。客かく。們ら。駭おど。き。叫き。ひ。て。素そ。破は。癖くせ。者もの。ど。逃に。が。を。な。と。て。六ろく。尺じやく。棒ぼう。以も。て。連つ。り。連つ。り。去さ。り。て。遮さ。留りう。ん

と去れども。跳踰て去るを。おは脱さぐと。五七人。追近づくを搔抓で。或は投退け打倒し。辛うて脱れつ。千日寺の邊に至る。追來る者もあらずけり。且く息を吻く程。前面より來る旅屋無僧の。尤も行過んと去てけるが。天蓋の窓よりして。某をつらく視て。和殿の養七あらむや。と呼うけられて打驚け御身の誰ぞ。と問うへせば。是則來女さゆ之送し訝り且歡びて。過去うさを相譚ん。と思ふものうら暇なれ。しが身危窮の折あるは。只云と其夜の更を。辭急しく告申せし。來女さゆ又駭た給ひて。とて天蓋を脱取て。某は被らせ給ひ。相伴ふて通霄路を走りて。佐界に赴た。是より日々二年米の物語を任り。又と米の御物語も。備細に承りて。歡しき大うさあらむ又悲しきも一入ありた先えや。是を受とり給へといひは。仇討免許の狀を項に掛たる紙推外して。秋布は通与せし。秋布是を受戴たて。今ふ初めぬ和殿の働た。再び得難た御教書状。身ふ恙もなく取復た。功の高たのさうい。しが夫ふも環會て。あへ伴ひ進らせ給ひ。此續に神明佛陀の其忠信を憐み給ふ。冥助も必ず筆書るならん。彼を思ひ此を思ふ。歡しきと就

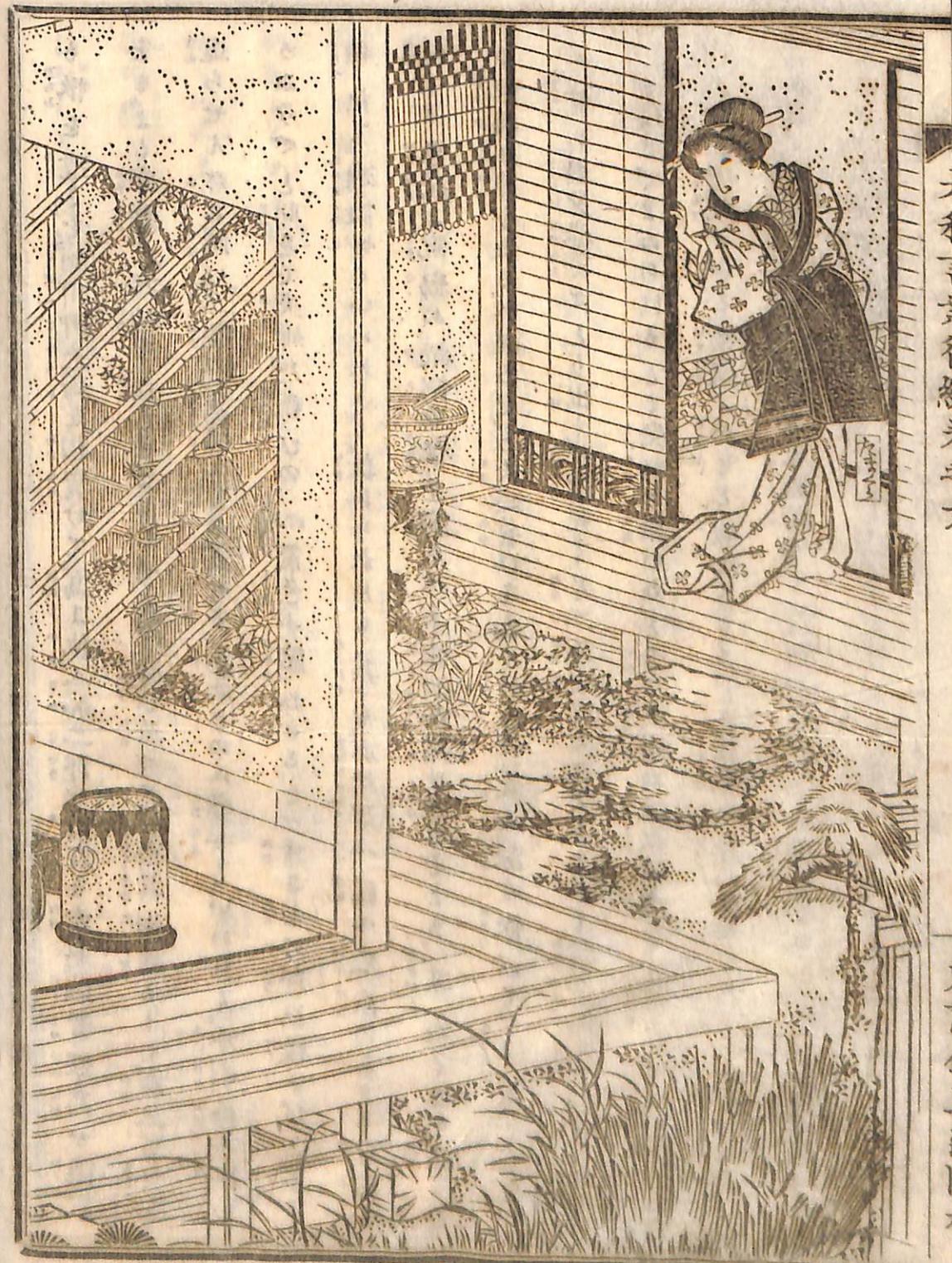
たて亦薄命あるの俊平の。嚮に家刀自妙御達の。分抱を受しとた。ものいひけるが程もなく。辭絶よけん音もせむ。いと痛し死事ならむや。といひつ。も亦目を拭へば。養七是を慰めて。漸くあると打對ひ。向ふ辭をうけられしを。秋布の君に申せば。一大事の口狀あれば。未だ應に暇なうし。不敬を免給へう。瀬川殿の舎弟なり。浦二郎殿の爲み。婿舅ふてをいされば。同く山路の谷を隔て。下流を汲る心地ぞある。寔にあるの翁み。初ての見參なれども。内室手枕殿の。豫てより。認てぞをいへば。なむも御目を給ひまうし。と辭急しく口誼を速て。膝を進めて燈燭の邊へ顔をさし出を。手枕につらくと。視つ。忽地駭たて。嗜御身の。といひかけて。逃隠さんとほる程。養七の手を拿てる。銀の釵兒を。手枕が裳へ。丁と打たる手煉の違ひを。席薦へぐさと縫留れば。屏居に控と報びけり。當下養七声高やうふ。絶て久し手枕殿。和女郎の目も養七を。むうし。此客の上毛商人木瀬屋鑿吉と見られ。敷いふふぞや。と呼うれば。若二郎も亦驚轍しく。席も堪む見えたり。を。忽地思ひうへけん。手を叉たて。黙然たり。有然又手枕の。脱れ難しと思ひ

つ、打うけられし銀兒を漸くは抜とりて。咽喉へ突立んとしてけるを。兼七早く衝と寄
 て。腕捕て推禁め。おも何事ぞ。狼狽給ふ敷。舊怨を思ふがゆゑ。され豈和女郎を殺さ
 んとて。えるくおへ。索て来んや。打うけたりし銀兒。むうし近江路の客店より。和女
 郎が逐電とる折。迹は遺りしものぢう。それを今までも失はざりし。和女郎は心の遣
 るは非む。環りあふ日のありもせば。是を返さるが胸中を。去らせく安堵させむやと。思
 ふが所以の所為ありけり。虚言をもく客は媚。可惜財貨を亡にまらる。かへく遊君の習
 かるは。實言と信く産を破る。皆其客の愚鹵ある。迷ひの致す所。然るを悟らで遊君を
 恨む。いよく愚ましていふふも足らむ。これも昔其一人ふて。深く和女郎は心地感
 ひく。多くもあらぬ本錢を失ひ。賸彼此より。受得ざる額を引債とく。かの身價の金三百
 兩を。漸くお調へつ。債身は程もなく。歸郷の途より逐電せられ。其折をいと媚く。
 腹た、しきの限りなれを。往方知れ給はせん術あらむ。空しく故郷へ歸し。ども多くの
 債は生活の便著も遂はなくなり。獨鎌倉へ赴た。博多殿は仕へより。志を改め

く。先非を悔ふ事大うとならむ。上毛は在一時も。武藝の好む技なれば。いよく倍心が
 けて。大刀抜く術も覺たり。今更思へば。己が爲。和女郎は則善智識。悟道の祖師であり
 けり。とひとり覺て。怨もなし。むうしをいへば。和女郎夫婦の。うへの。無是上恥ならん
 や。己がうへも亦羞。然るを些も諱むして。むうしの名さへ告ぐる事。深た心のあまば
 へ。不覺なる事を給ふな。と理り迫り制れば。手枕いと面なくて。流る、涙を押し。去
 りいれるれば。いれる、程。苦し死者の。むうしは侍り。數ならぬ身を寵し。得難た財を
 費しつ。早く苦界の苦を抜く。給ひし恩を仇ふ。逃走する罪科の。重たを知らぬ。よ
 侍れども。知りつ。思ひ止難た。只身勝手な侍戀の欲。天道許し給は給は。久後の斯な侍
 ぞう。禁む。死し給は給は。といひつ。も亦泣沈め。若二郎稍進出。兼七打對ひ。道
 と密丈夫の。魂。海なを胸の。廣が。羞。何事もいひ難うり。さばれむうし手枕。三百兩
 な侍其身を偷く。走りしを知りつ。も。相伴ひ。某も。罪の免むぬ相竊。人の財を賊
 まる。王法律家の。允さぬ所。幸し。免る。とも。恥。是より大なるなし。覺期極め

候。といひも訖らむ脇挿の。刀は柄は手をうけく。自盡せんとする程は。養七透さむ推禁め
く。正なう候根塚ぬ。内室にとまれうくまれ。御邊も感ひ給ひ一敷。縦夫婦共侶は。刃は命
を斷給ふとも。その只情死といひまくの。誰う潔白の人とせんや。三百金ごは賈ひ給ひ
作り一罪の自然は滅ん。あれらの理義を思ひを。と説論されて若二郎も手枕も袖頭
を擡ぐ。教諭定は味ひあり。然りおがら。縦家産の田も圃も悉皆活却しても。三百金
に調ひ難し。といへば養七微笑く否。某が望るもの。錢財の事は非む。と云を夫婦の訝
して。然らば又何をもく此身の罪を贖ふべしと問は養七。さればとよ。浦二郎殿の貴方の
婿が存。悻順より一厄難を。舍兄は代り身まがり給へば。系叔どの、憾に更へ。二親達も
朽をいくいと媚くこそおをさるめ。いんや又いぬる春。采女ぬいの舍弟は代りて。一とび
こへ来ませしと敷。偽をもて謀る者の。又偽よよりて取る、事あり。こきも亦御邊親
子の怨を醸る。分ありた。且采女ぬいと浦二郎殿と分厘も違ひ給へば。今更其人おらむ
と云とも。なほ疑ひの解がさうらん。これらの疑惑。妬忌遺恨。よく令弱は説論しく一毫

も恨を遺さむ。瀬川御夫婦を相資けて。為は仇人加二郎が所在を索ね。賊首經高が隠家
をも。よく穿鑿く大功を。立させまゐらせん。と誓ひ給ひ。某其謝義として。彼三百金を
進らせん。然る時の二親の。舊惡を雪め盡せる。系叔どのの孝女といわれん。承引給ふ敷。い
うふや。と問きて夫婦の歡びの。心氣色お顯れさる。そが中若二郎の幾さびとさく
領たて。適微妙くいわれさり。敷あらねども。某も亦是男一匹。感激のあまり其議は
任しく系叔は説勸め。疑似の恨を解まべし。非如女兒の諾ひむとも。某かくまで云うら
る。此義お障りあるべうらむ。と夫婦誓ひをまきければ。養七深く歡びて。懐ふよりけ
る。昔の購身券書を。とり出し打披た。若二郎夫婦のほとりまさし。措今約束の三百金。翌
とも延きでまゐらる。とく受取め給ひね。と云は夫婦の感涙の。落るも覺を受戴た。此
時までも俯沈とさる。系叔は云々と。報知らまきども系叔の。涙お烏れて。應を得せむ。吉次
と秋布の。養七が理義分明。人状罪せて送ふ利とさる。才覺の灼然あるを。只願感嘆とさ
りける。有如此程は俊平。一併云と噓くふ。人々齊一見うへりて。嗜あ、ろおむ。絆は



終れて、今抱ふいと等閑ありたといひつゝ、兼七吉次夫婦、手枕も共侶も、從右自左、進まよ
 りく。やよ、俊平村澤氏、絆の趣の聞え、敷、吉次の恙あり、兼七も還り来つ。甚度や、什
 度やと、諸聲一齊問慰めて、抱起一つ勸れば、俊平僅に眼を開た。左見右見つ、笑
 の中、心、挽繰々、轉忽離と、忽地息の絶ふけり。噫とむりり泣く手枕が、覺て空にた夢の
 迹、浮世の秋と秋布が、俱に唱る佛名の、南無阿彌陀佛、阿彌陀佛、阿彌陀佛、みどの諸時雨、
 夜風寒けく更闌々、夏おた宿が衰れぬる。

第廿一回

執念利鈍は入る夫妻を追ふ

却説関養七は、若二郎夫婦と商量して、俊平が亡體を桶に斂めおどまつ、其曉方に擡出
 して、背門より一町むりある。田の畔の墓所に埋めて、雜松を栽く表とま。詰旦若二郎は
 能化寺の法師を招た。追薦讀經丁寧。俊平が菩提を吊ひけり。其事果々若二郎は、吉次
 主従は相譚やう。母屋とく幾間もあらぬを、夫婦主従一處をいさば。心詰りよあらんを
 らん。奥庭の前面は、細小なる離屋あり。こゝ某が里人等も、武藝を教とり、比稽古所も

建たる之、久しく人の住ねども、舊たる儘に、綱代天井もあり、席薦も今も布てあり。けふよ
 り彼處へ移らせ給へ。朝夕の食物は、母屋より進らせん。近屬世の風聲を傳聞し、彼經高
 の西海は、今おほ隠れをるといへり。然りけれども、其隱宅を、定うおまきる者ありとぞ。か、
 依便宜も候へば、今茲にお、一杖を駐めて、經高等を索ね給へ。某も亦此義を就く。凡心
 の及ん限り、穿鑿をべく候と。云、吉次秋布兼七、主従一齊一歡びく。一議及ばむ。此日よ
 り、根塚が家の奥庭ある。離亭も移りけり。とかくまる程もたや。俊平が初七日の建夜も
 もありしう。吉次は、今朝とく、手枕は、辨導せられて、能化寺へ詣り、亭午の比、歸來し
 けり。抑、此能化寺の本尊は、平將門が女兒ありける。如藏尼の作物ふく、利益ありと云
 ある。有比者、只俊平の爲のそあらで、浦二郎が冥福をも、祈らんとての所行なれば、又未の
 左側より、秋布の兼七を將て、伴の蘭若へ參詣を、是田の辨導あり。あると若二郎が、秋も擡
 るつ、ゆくゆり。此比までも、糸萩は、只吉次を浦二郎と、思ふ疑の解されば、妬死事限る
 も非む。二親の暇ある毎、お兼七は、唯諾する。事の情を説示して、さほく論せども、

言と正しげよ。それの兄の采女に浦二郎の身代をく人小撃まゝに小死。といひお
らへる面り。よ小娘と樂しげ小。いつまでか、懸り舟。まが上よとつ秋風小胸のあら
波打返一晝夜燃る火の國も心づく一の晝震と一いへど。憂と見るめの浦寂て。あはよ
れとの謎々歎心つよ一と身を揺る。麻薦の綻搔捨り。涙と、も小怨むれば吉次のい
と聞と死おしと。思へども恃らぬ。如右思ひる、を無理あらねど。他一女子に迷へる爲よ。
いうでうに偽るべ死。鶴ふも諭せしとおがら。浦二郎小に臂小疵おし。今眼前小同胞が雙
袒ぞく見まるあらば。其疑ひに氷室成。夏の氷と解身うゆを。憾らくに浦二郎が。世を早
うえつると。御身のまらにそれも亦。腸を斷歎死へ。然りけれども尚懸一死に。いぬる日よ
秋布が阿川湊小船歌りし。いと腫張とる乞者を見たり。其折浦人のいへりし。件の乞者
に去々歳の春。向の磯に流寓り小死。身は金瘡さへありし。かど。里人の介抱小く。甦生りし
ものぢといへり。是よよりて秋布に。倘吉次よあらむや。と思ひよけれど。面影變りて。似るべ
うもあらざりし。小。件の乞者をものを得いにむ。且秋布主従と見れども。認めぬ。面色お

糸萩の只打泣くのミ。心地いと煩いとく。垂籠く便室より強て意見を加まば。衣引被
 ぎ打卧して。三とびの饌ふも向にねば。二親もえてあまら。心苦しく思ひけり。とくま
 る程。此日秋布と養七の能化寺へとく出てゆく。父若二郎も紫内ふ立ち。留守ふ其身
 と母手枕のミ。且吉次の只ひとり。離亭よりあり。糸萩竊に歡びて。日比の恨をい
 んと思へば。素れし髪をとり揚て。薄化粧いつ衣脱更。離亭へ起たけり。かくとも知ら
 ぬ吉次の。徒然に勝むして。倚寓柱に背を合。尺八の笛音ふ。吹まきみつ、餘念おた。折
 うら此方へ。来る人あり。庭木履の音まきければ。吉次急に見うへる。是則別人あらむ。
 あるの。女兒糸萩おまき。そが儘笛を側お措て。ある糸萩どの来ませ。歎いぬる比より
 病著ふて。垂籠てのミをいまと。聞は違え見え給ふ。いと歡しくおと。いふ身邊
 へやをう進みの寄れど。背向になりてものいむ。漸くふく尻目ふ見うへり。南浦二郎さ
 へ。まど添卧のせぬ々れど。親と親とが約束まき結び。縁の聘さへ。采も納め。妹と伏の。
 山迹あらむも土と火の。相性さへ。吉野川。深た契りを増花。思ひうえさせ給ひぬる。其虚

言と正しげよ。それの采女。浦二郎の身代。人お撃まき亡ふた。といひあ
 らへく面り。よふ嫂と樂いげふ。いつまでか。懸り舟。まが上よと秋風ふ。胸のあ
 波打返。晝夜燃る火の國も。心づくの盡處といへど。憂と見るめの浦寂て。あはよお
 れとの謎々歎心つよ。と身を揺る。席薦の綻搔捻り。涙と、もふ怨むれば。吉次の
 と聞きたふ。思へども恃らむ。如右思ひる。無理あらねど。他女子は迷へる爲。
 いうでうの偽るべた。鶴ふも論せ。とあがら。浦二郎ふの臂ふ疵ふ。今眼前ふ同胞が。雙
 袒ぎく見走るあらば。其疑ひ氷室成。夏の氷と解易う。懐らくの浦二郎が。世を早
 うあつると。御身のまうのそれも亦。腸を斷歎た。然りけれども尚憑いた。いぬる日
 秋布が。阿川湊ふ船歌り。いと腫張る乞者を見たり。其折浦人のいへり。件の乞者
 の去々歳の春。向の磯に流寓りふた。身は金瘡さへあり。かど。里人のみ抱ふ。甦生り
 ものぞといへり。是よりて秋布の。尙吉次あらむや。と思ひよけれど。面影變り。似るべ
 うもあらざり。件の乞者ものを得いむ。且秋布主従と見れども。認めぬ。面色おれ

其人の非ざるべしと思ふものうらみ憐みて、餅を買取せんとて、舊来一方へ五六町
立ちへりたる隙に乞者のをらむありしと。有此者乞者の吉次が、冤鬼ふもやありけん歎
とく。遺憾一さふ泣ふた。秋布が吾儕は報たり。是時までの秋布も、動の濱ふく撃れし者
を。吉次之と思へば。倘彼乞者の浦二郎が亡魂の願れ一歎。尚死をせし現身の世は存
命である者ならば。竟に再會せで己ん。近た日に向の磯へ。索行まく欲されば。絆の
虚實の定りふ知まん。其吉左右と俟給ひねと。論せば頭と打掉て。さういふ思ひきらせんと
く。兩人竊に謀合せ。辭巧ふた事といひおらへ。賺し給へど。それを誰うの實言
とせん。尤もよい程に淫し給ひ。浦二郎と名告りくも。左の之惜しうもあるまじた。
強面人の心やといひつ、よと泣沈めば。吉次思ひを勃然と去く。おる餘りある怨言う
か。縦吾儕が吉次あらで。浦二郎之とも。渠も亦聖賢の。經書の諳たり。天魔は魅憑らる
ゝとも。おでふ。嫂と不義せんや。況浦二郎あらざる者。浦二郎と名告れといひる。か
ばうり誣さるといふ。且いぬる實小叢七が。約束さる疑解の一條。三百金の身價と棄捐

ふせいの御身の親公の。舊具と雪ぐまあらむや。有右者御身の心もて。親も考へ。他ふ
も信あり。是議を忘れ給ひ一歎。といひせも果を糸裁の。瞋まる肩を打揚て。心織た説どう
か。昔損せし財をもて。人の怨を解んといひ。武士ふ似げた薄情。二親達いとまれかくま
れ。三百兩の舊借財。最借郎を換んといひ。さういふ思ひ侍らむら。けふより母屋へ来
あませ。彼秋布の淫婦と。いうで一つは在らせんや。とくく来ませと。携りつ引つ。泣辭立
くど果一た。愚痴は疑さる妙子の。嫉妬の欲責られ。吉次の困果。いとせん術を
た折ら。母手枕が母屋ある。様頼より聲高やう。糸裁々々と。呼立れば。序次歹と思へ
ども。了得親の勝よしも。泣貌隠を糸裁の。糸の糸の戀衣来つ。甲斐ふた恨のうむく。
いひも盡さで戀人。離亭の腰障子。蔭より霎時闕窺。阿唯と一併應つ。母屋を救き出
く行。妬婦の後影。さしも目送る吉次。一息吻とつたまなり。有然程に手枕の。女兒を使
室は呼近づけて。とり散らる縫刺の。衣片よせつ。牌を進めて。喃糸裁。今更云ふ及ばねど
も。浦二郎殿は生寫りある。采女ぬりを疑ふて。心病して打腹さち。思ひうねてやうちつけ

ふいと仇あつくものいひ給ひ。慎み淺き女子ぞと。袂せられんと。親がひよいと胸くるく思ふぞう。譬ばよや彼人が浦二郎であらんとも。そを争ふく浦二郎。あらむといへば既よえや。心變り空華人あるを。おほ執念深くも慕ひ給ふ。世ふ愚魯なる所行あらむや。好も好ぬも一盛り。久後遂難死縁ありた。とそれうら思ひ絶給ひ。却母後安うほべし。斯いへば子が子ふも。取うまやうい死言あがら。まらにが昔河竹の。夜毎替る客でまら。思ふよ遭いで思ひぬ人よ。あふみを強顔死とこの山。屏風のうられ小夜衛。鳴曉を日も多うりた。只假深の契りども。人ふ恨ある者を。然るをいんや戀婿。飽まで宵する疑ひの。怨をさこそと。思へども。其人あらぬをいうまにせん。加以いぬる宵。養七殿の賤り。まらにが贖身券書の。恩義の枷を被らま。否といわれぬ誓言を。御身によくも聞かやある。むうまらにが身をもちぎほの。好うらぬ故。今もかも。子ふ教ゆべたよ。いふければ。老く非を知る懺悔話説も。御身よ心得させんと。思ひて慢し説誇ると。思ひ給ひを誰上ふも。愆あるのみ。な年の若か。一日の科おれば。親の云と聞きんこそ。其身の爲ふ侍る

う。彼處の言の洩聞えし。向の浦の乞者とやらん。そが婿殿であらんふ。いと憑りたよ。もあり。いふふとあらばかの妻子の。秋布どのまら死せりと思ひ。采女ぬいの恙あ。こ。再會を給へば。浦二郎殿おればとて。死せりとも定め難し。こまらよ。を思ひ涙。采女ぬいの事。いと。思ひ捨給へ。まらにを。とまれかくもあれ。参々公へ。こよお死孝行。よ。死子ぞ。聞死給へ。聞死給へと。垂乳母。繰返され糸裁が。心。いと。えり管の。鍼も刺る。苦しさ。涙。泉と涌うへり。引提の水も湯とどなる。胸の。破の。違る顔もなを。漸く鎮め鼻うちかみ。けふは初めぬ事ながら。かくまで。叮嚀。御給。は。御慈愛を。いうでう空。聞侍らん。尚又心。問定め。後。應。侍りてん。且。俟せ給ひね。と云。手枕含笑。叔。聞死給ひ。早の。應。御。末。遂。難。死。もの。お。れ。ば。尋。思。の。上。の。應。を。聞。う。ば。参。々。公。も。安。堵。給。ひ。な。ん。か。へ。ま。く。も。思。ひ。迫。り。と。歎。死。を。倍。さ。せ。給。ふ。な。と。心。ほ。く。る。を。聞。う。け。て。生。應。一。く。泣。ふ。ゆ。く。心。の。中。に。今。宵。の。中。に。死。ん。と。思。ひ。決。め。た。る。妙。心。ぞ。是。非。も。な。ら。此。日。も。既。に。黄。昏。時。能。化。寺。よ。り。歸。り。来。侍。秋。布。も。養。七。も。早。く。母。屋。に。解。を

うけく。内室うちむろ只今ただいま歸り侍り。あるのおの叟おきなも足あしの痛いたむ。後あとより徐あづかに退はからんとく。なほいく町まちう後あとれ給へど。程ほどなくかへらせ給ふべし。と云いふ手枕たまくし障子せうじを開あけ。思おもひしよりい早はやうりた。きこを疲つか勞れ給ひけめ。夕ゆふ饌ぜんを今いままゐらせん。且まく休やすひ給ひぬ。と云い間まはえや秋布あきふ等らの母屋もやを遠とほる庭にわ傳たひ。離亭りていへ入りよけり。夕ゆふ轟とどろの點燭てんじやく比ひ。手枕たまくしがもち運はこぶ。煎茶せんぢ飯櫃いひつ菜羹さいかう。離亭りていの蕭然せうぜんありしも。うち相譚あひだ辭こと賑にぎしく。睦むつげある吉次よしか夫婦ふうふを。姪めいしと思おもふ糸萩いとはぎも。思おもひ絶たても絶たえぬ。裏見うらみの葛くせの芭間かまより。もい見みゆるやと椀わん頬ほは。伸の上のれども哉や篋かの。冬樹ふゆぎの枝えだは隔へられ。視目み定さうふ届とうねども。障子せうじは映うつる人の影かげ。彼かれは正ただしくとが郎らうと。秋布あきふふこそあらんむらん。是これ見みよういふ寄添よそふく。何なにを恨うらみの面當つらあてど。噫あ腹はらさしく。いうふせん。左ひだりても右みぎても死しぬる身みの憎にくしと思おもふ彼淫婦あのをやめと。刺さしも違ちがへく。強面つらうりた。郎らうし思おもひ知しせん。と思おもひ詰つまる無む分別ぶんべつ。准備じゆんびの短刀たんたう抜ぬけく。潜ひそ近づぢく卷石まきいし傳たひ。六七ひちしち歩行程ほしやうは。能化のうげ寺じより歸かへり来きく。背後かへは關せきふ父ちち若わか二郎にらう。糸萩いとはぎ等らと呼制よびまむ。吐あ嗟あとむりり打驚うちおどろた。見みうへるをえや若わか二郎にらう。痺しびる足あしを一足いつそく蜚ひふ。走懸はしりり引戻ひきもどし。椀わん頬ほと推居おし居ま。是こ成な無敵むてき者もの何事なにごとぞや。いぬる日ひより母はは

ふもいひせ。送身かたみ代がわりは論ごんしても。まど聴きけぬ質太しごと死し現性こんじやうよふた怨うらみを根ね持もつ。今いま其その刃物はなモノの三昧さんまいは。寔まことふ沙汰さたの限かぎりなり。親おやの意見いけんは従したがひぬ。不ふ便びんながら手てふりけく。後のちの患うれひを斷たんのミ。吉次よしか殿どのの事ことは。潔いさぎよく思おもひうへま敷か。秋布あきふどのとも睦むつしう。客人きやくじん達たちを慰なぐさめ給たまへ。應こたをせぬ。かくても否いな敷か。然しかは時ときに放はなし難がたく。覺期かくごをせよ。と敷い固こく聲こゑも。外またへ憚はやか親おやの慈あはれ悲かなし。刀かたなの柄つかは手てを掛かれども。糸萩いとはぎ怕おそ怖おそく。氣色けしきなく。親おやの仰おほせを用もちひぬ不孝ふこう。死ししく泥黎でいりへ墮おつとも。思おもひ斷きられぬ此身このみの因果いんぐわ。そを憎にくしとく撃うたんとらば。撃うたむ死しおぼかくまでよ。ものも思おもひぬ敷かれもせど。況まい親おやの手てよか、らば。その本望ほんぼうは侍はべ侍はべし。とく斬きつ給たまひぬと。身みを衝つ著つつ。項うらちを伸のし。死しを究きめよ。妙たぎの執念しやくねん。退ひき退ひきぬ若わか二郎にらうは。云いふや及およぶと。刀かたなの鯉口こひぐち。既すでに四五寸四五抜掛ぬきかけを。やよ俟まち給へと。禁こ止ど者ものは。是こ則すなはち手枕たまくしへ。目めを泣な腫はり。走りはしりつ。いと情強じやうぢやうた此子このこを憎にくみて。親おやの手てづらう撃うた給ふとも。一旦いつたんの怒いかり治おさまり。後悔ごうかいし給ふ事ことあらば。死ししたる者もの後のちらんや。よく深念ふか念ねんし給へういと。云いふ若わか二郎にらう雙眼ふためを睜あけ。然しかりとも免ゆるし措おて。秋布あきふどの一痕ひとを負おふ。まが養やしなひ七しち唯諾うけひする。かの一條いっぺいをいうません。然しかる

時の親も子も死しての後まで悪名を削らるゝと死あるべうらむ。要こそあれと。懐より
 準備の早繩とり出しは。糸萩が双の手を。背へ挨拶挨拶著々。尤も韓々と鄙て。背門の此方
 の老松の幹は楚と繋留め。嘆息一つ。やをれ糸萩。目今撃べた刃も換る。此鄙の親の
 慈悲。死ては花の咲く時もおた。松の標は恥らひ。糸萩の心を改めよ。今宵一夕辛死め見
 せん。手枕も。ち心得。憐愍をふ被給ひ。とくおあへ。と。伴ふ打落る糸萩が。短
 刀とり揚引提。障子を敲と閉れども。心をあへ。二親の。残る夜寒の肆月の空の。八十八
 夜の別霜。解ぬ思ひ。雲間の月も。庭の隈ある樹下。心の鳥夜も迷い。と。燈火の光速
 く映を。出居の方おど退りける。有右程は離亭ある。吉次秋布表七等。糸萩が事の趣。既
 不定う。小洩聞。いうおをべ。たと相譚ふ。養七聲を潜して。執念深く疑る女子の愚痴。
 今更おせん術なし。然るを尚虚々とお。よ。逗留し給。是災禍を俟。庶幾。彼大功。細
 謹を顧む。大禮。小護を辭せむ。と。云古語ある。ある。夫婦。告。と。と。立退せ
 給へう。といへ。又秋布も。豫て夜話も。告侍り。と。主従を極る。彼無名氏のい

へる事あり。御身同胞の妻る者。一箇の榮。一箇の枯。三稔の後。乾坤丸ふて。會んとい
 ひ。今茲お當れ。その何處。知らむ侍。現養七。諫の愛。旅行の準備。給へ
 う。と。云。吉次領。猛。杖。笠。よ。と。準備。暇。あ。り。け。り。然。ば。又。糸。萩。の。更。ゆ。く
 庭の樹下。其身を繋留。且親さへ。恨め。思。迷。ひ。邪魔。人。畜。三。惡。道。の。苦。を
 を。此。世。う。ら。ち。死。天。の。山。劍。の。林。の。松。の。鍼。引。ば。夜。露。の。霏。々。と。か。ゝ。る。歎。れ。誰。が。所。爲。ぞ。
 み。秋。布。が。所。行。を。釋。も。釋。ぬ。綁。の。索。さ。へ。延。短。夜。の。曉。る。を。ま。と。て。死。ぬ。る。と。も。
 怨。も。竟。お。彼。人。々。を。執。も。殺。さ。て。己。べ。た。歎。と。て。跳。揚。々。々。狂。へ。ば。狂。ふ。心。猿。意。馬。の。尾。筒。似
 たる。亂。髮。顔。お。被。れ。ど。兩。の。手。お。か。ね。ば。現。開。花。は。蟪。蛄。う。け。一。風。情。お。く。亦。潜。然。と。打。泣
 つ。涙。お。濡。ら。を。夏。草。の。末。の。露。歎。本。の。露。落。ま。ば。同。谷。川。の。岩。お。推。る。心。地。一。く。轟。く。胸。ぞ
 やる。瀨。お。た。然。程。よ。吉。次。夫。婦。表。七。等。の。早。く。行。装。を。整。て。出。ん。と。ま。る。お。與。庭。お。る。糸。萩。が
 綁。られ。る。邊。を。過。ら。で。行。路。お。け。れ。ば。笠。を。翳。一。面。を。背。け。て。走。り。て。母。屋。を。遠。り。つ。辛。い
 く。外面。なる。諸。折。戸。を。密。と。推。開。て。往。方。も。定。め。を。立。出。し。を。糸。萩。の。信。と。見。て。噫。朽。を。一。後。妻。が。



糸萩の執念と利鎌を働しむ



たつた

若二郎

三

郎を誘ひ出さる。逃るとして逃さんや。返せ戻せと。呼びうけて。追まきまれば。緋の素すね。忍地引止られて。脣居しんごは報うらびつ。又起つ。幾回いくたひとふく氣を悶もむ。采さいの地上ちじやうは轉報てんぱうびつ。泣なり外ほかのなうりけり。有右あう又吉次夫婦きちじふとご主従しゆじゆんの根塚ねづかが宿所しゆくじよを潜ひそび出いく。行事ぎんじ未まど幾いくあらむ。夏なつ草深くさふか一徑路ひとぢやうぢを過たるとまゐる程ほど小思こしのむも。鈎索かぎあひは。被倒かけたふされて三人さんにん齊いっせい。忽地たちまち挫おと報うび。々たれば。埋伏おぼ伏おけん暴雄等あつおとごらじやうにん。十名じゆにんむうり顯あられ出いく。犇ひしく々と綁いめつ。豫か々準備よろこびの長韓櫃ながかんびへ。吉次きちじ秋布あきふ七等しちとうを。一人ひとり列らく打容うちようれて。造化そ精妙しやうめうと。細々さいさい言いたつ。聽きく三棹さんさうの韓櫃かんびを。擡た起おしつ。足あしむやふ。往方かうも知しらぬありまけり。素下すげ某生まうせい再説さいせつ系萩けいさきの。吉次きちじ秋布等あきふとうが出いく行ゆしを見みつ。遺恨いこんは堪たざれば。稍息しやういきを吻くた身みを起おして。噫あ朽く惜しや腹はらさしや。郎らうを宿略しゆくりやくし淫婦やんぷを見みつ。蓮いを。綁いの。素すは自由じゆりゆうを得えざれば。一念い凝ねんて。虎こと見みく。石いし小立せうたつ矢やもあるもの。よしや鐵てつの。鏢くさりありとも。念力ねんりき状じやうもて斷を断をてん。況まこれらの麻索あさぢを。いうふまべたと。血走ちる眼まなこは四よ下りを見廻みまわし看輪かんりんせば。遙はるか彼方あつたの椽えんが頰かの。下したは舊ふるなる草薙くさかり鎌かまのありしを。漸やうやうく見出みだして。噫あ歎なげしや。よた物ものあり。然されども間遠あひだくして。足あしも届とむ手ての愜かむ。世よは早さ蛇へ成なり暴神あつたとも。こ

らにを憐あはれ給たまふもあらば。とく彼鎌あのかまを取寄とりして。この素斷すえりせ給たまへうし。憎にくしと思おふ淫婦やんぷを。追留おひどめく怨うらみを復かへさん。無心むしん非情ひじやうの物ものもあれ。こが念力ねんりきを移うつさん。湯立たの釜かまの自然しぜんと鳴なる。風かぜ信ひの車くるまのちのづうら。輪あやまる如ごとくあの鎌かまの。出いくあふへ寄よざらんや。疾そくよれ利鎌せいかま寄よむや。とき取とがら。人ひとはもの云い如ごとく。疾視しやくし詰つむる目めも瞠まじがで。氣きを暢かまる執著しやくしやくの。心火しんわ忽たち然ちと燃出もく。閃ひらめ丸飛まるとで利鎌せいかまの邊へへ。落おると思おへば。怪あやむべし。鎌かまの倏忽しゆくつ地上ちじやうを離はなして。閃々ひらひらとしく系けい萩さきが。身邊みへへ来きぬると見る程ほどは。綁いの素水すゑも溜たまらむ。矢庭やにわは弗なと斷捨せりたり。吁あ塘たうしやと。系萩けいさきの。手てを働はたらかしく搔かき取る。鎌かまの柄つかを握にぎり外ほか面かたへ。出いる背後うしろは若わかく二手枕にしやまくし。現妻げんさいは女をんなの執念しやくねん。留とどめやつと。喚こゑぶ聲こゑを。耳みみももうけぬ。系萩けいさきを。尚なほも違ちがうと追おつ追おつ。畢竟ひつじやう吉次きちじ主従しゆじゆん暴雄あつた等とうは。捕とらられ系萩けいさき亦是これを追おふて。甚い度たなる話ものがたり説つくある。その次つぎの巻まきは。解と分わるを馳はねりし。



